

## 2013年 七ヶ浜アウトリーチ 報告書

### 《事業のねらい》

- 鑑賞プログラムとワークショップを組み合わせ、音楽教育における鑑賞と表現活動の有機的な関連を図る。
- ワークショップでは児童のグループにファシリテーター役の大人が加わり、創作活動のサポートを行うと共に、表現力及びコミュニケーション能力の向上を図る。

### 《実施概要》

11月20日実施 亦楽小学校 音楽室

2時限目 (10:05~10:50)「鑑賞型アクティビティ」(6年生全員) 音楽室

3時限目 (10:55~11:40)「ワークショップ」(6年1組28名) 音楽室・教室

4時限目 (11:45~12:30)「ワークショップ」(6年2組28名) 音楽室・教室

アーティスト：仲道郁代 ファシリテーター8名

11月21日実施 松ヶ浜小学校

2時限目 (9:40~10:25)「鑑賞型アクティビティ」(6年生全員) 音楽室

3時限目 (10:35~11:20)「ワークショップ」(6年1組29名) 音楽室・教室

4時限目 (11:30~12:15)「ワークショップ」(6年2組28名) 音楽室・教室

アーティスト：仲道郁代 ファシリテーター8名

11月22日実施 汐見小学校

2時限目 (9:40~10:25)「鑑賞型アクティビティ」(6年生全員) 音楽室

3時限目 (10:45~11:30)「ワークショップ」(6年1組27名) 音楽室・教室

4時限目 (11:40~12:25)「ワークショップ」(6年2組27名) 音楽室・教室

5時限目 (13:45~15:20)「ワークショップ」(6年3組27名) 音楽室・教室

アーティスト：仲道郁代 ファシリテーター8名

### 《内容》

#### ◎鑑賞型アクティビティ (45分)

#### ① 導入、アイスブレイキング

(活動の様子)

- ・隣に座った児童やファシリテーターと無言のまま目を合わせながら握手をする。
- ・「嬉しい」「怒っている」の感情を込めて握手をする。



(ねらい)

- 気配や表情、手の力などから相手の気持ちを感じ取る。また自分の気持ちを伝える。
- 言葉を介さないコミュニケーション体験。

(握手する様子)

## ② 演奏／愛の挨拶（エルガー）

- ・仲道氏は「私からの音の握手。どんな感じか、考えながら聴いて下さい。」と話し、演奏する。

- 演奏家の思いを想像しながら聴く。
- 他の児童の意見を聞く。  
児童の意見—「言葉には出来ないけど、何か伝わった」



(音楽に込められている思いを感じよう)

## ③ 詩／「ぼく」（作・谷川俊太郎）

- ・軍隊ポロネーズ（ショパン）、別れの曲（ショパン）、愛の挨拶（エルガー）の3種類の演奏を背景に、同じ朗読を3回聞く。

- 同じ詩の朗読でも、音楽によって受ける感じが変るという感覚を体験する。  
児童の意見—「言葉には出来ないけど、みんな違った感じ」「詩を音楽が支えている感じ」  
「音楽があると、“何にでもなれる”のところが決意がある感じ」  
「明るい感じ」「お別れっていう感じ」「自信持っている感じ」など。

## ④ 演奏／バラード第2番（ショパン）

- ・仲道氏は静けさを持った冒頭のテーマと激しさを持った部分をそれぞれ短く演奏した後に、「どんなお話をしているのか考えながら聴いて下さい。」と言い、1曲通して演奏する。
- ・児童は速く動く指、大きなピアノの音などに驚きの眼差しとともに、何かをイメージしようとしている。

- 静けさと激しさの中に、どんなストーリーがあるのかを想像しながら聴く。



(演奏を手の動きに注目して聴く)

## ⑤ 演奏／黒鍵（ショパン）

- ・児童たちはピアノの周り（鍵盤が見える位置）に移動して、演奏を聴く。

- 右手は黒鍵のみで演奏していることを目で確認する。

## ⑥ 活動／歌

- ・ペンタトニック音階の説明を聞く。
- ・童謡「ぞうさん」を全員で斉唱の後、グループに分けて輪唱する。
- ・メロディの高低を考えながら、1小節ごとに逆さにして歌ってみる。
- ・逆さメロディを重ねて歌ってみる。



(「ぞうさん」を題材に歌う様子)

- メロディを操作する楽しさを体験する。
- メロディを操作する体験をワークショップでの創作につなげる。

⑦ 演奏／マ・メール・ロアより“パコダの女王レトロネット”“妖精の園”  
(ラヴェル)

・この曲の題材となった物語を聞いた後、演奏を聴く。

- 物語と重ね合わせながら想像力を持って聴く。
- ペンタトニックの響きを、より意識して聴く。

⑧ 演奏／バラード第3番 (ショパン)

・この曲の題材とされている詩・水の精の物語を聞いた後、演奏を聴く。

- 物語と重ね合わせながら想像力を持って聴く。



(連弾マ・メール・ロアより)



(演奏に集中している様子)

◎ワークショップ (45分)

① ボディパーカッション

・ファシリテーターがリーダーとなって、手拍子送りや、擬音語を使って身体表現を共有する活動を約5分行う。  
・「しっかりつかむ」「しっかり生きる」という言葉と、あらかじめファシリテーターが考えたメロディを提示して、皆で練習をする。

- 強弱や高低、タイミングなどの要素を身体表現しながら、一体感を共有する。
- 目や仕草でのコミュニケーション。
- 模倣と伝達。



(ボディパーカッションの様子)

② 課題提示

・仲道氏が詩を紹介し、この詩にメロディをつけて、皆で演奏をする、という課題を提示する。

「しっかりつかむ しっかりつかむ まことの知恵を しっかりつかむ  
困ったときは 手を出して ともだちの手を しっかりつかむ  
手と手をつないで しっかり生きる」 (詩・井上ひさし)

- ・ルールは、「音はピアノの黒い鍵盤のみを使う」、「4拍」、「言葉の意味を考えながら作る」。
- ・「しっかりつかむ」と「しっかり生きる」は練習したメロディを使う。



(詩の紹介と課題提示)

### ③ グループ分けと創作

- ・全体を4グループに分けて、言葉を割り振る。
  - (1)まことの知恵を (2)困ったときは 手を出して
  - (3)ともだちの手を (4)手と手をつないで
 「しっかりつかむ」と「しっかり生きる」は全員で歌う。
- ・創作活動は2グループずつ音楽室と教室で行う。
- ・各グループにはファシリテーターが2名ずつ加わり、ヒントやアドバイスは最小限にして、児童の意見を引き出す事を最優先する。
- ・メロディを作る時は、児童もしくはファシリテーターが木琴で音を出して確認しながら作業を進める。



(グループワークの様子)

- メロディを作りやすいようにペンタトニック音階で作る。
- 4拍子の理解。
- 詩の中にある思いや意図を考えながら、皆で意見を出し合う。
- 音符の並び方や高低、リズムなど工夫する。
- ファシリテーターは児童のつぶやきを拾い、形にしていく。

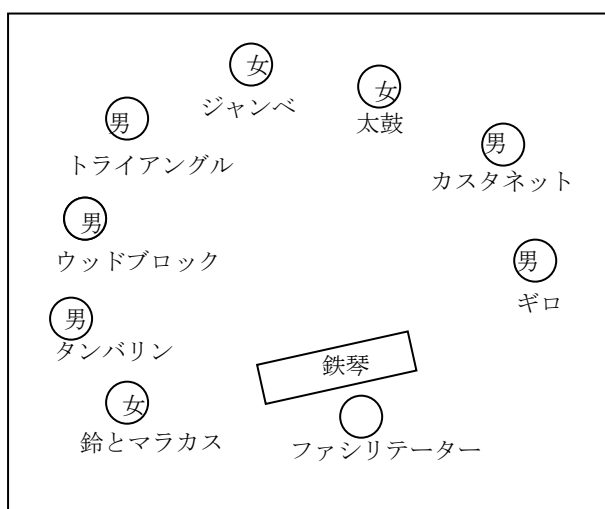
### ④ 練習

- ・メロディが出来たらグループごとに楽器を使用して練習に取り組む。  
楽器は、木琴、鉄琴、マラカス、コンガ、ジャンベ、ギロ、ボンゴ、鈴、和太鼓、タンバリン、クラベス、カバサ、ウッドブロック、トライアングル、カスタネットなどの中から、児童が自由に選択する。
- ・ファシリテーターがそれぞれのメロディを採譜する。

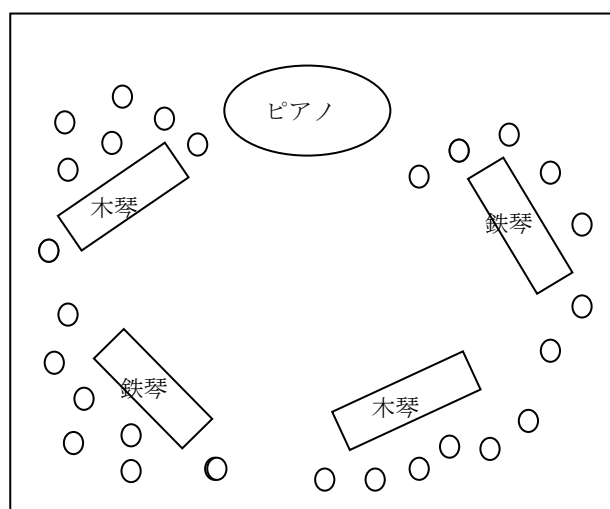


(グループごとにアドバイス)

- 楽器の特徴を生かし、強弱やアクセントなど工夫して演奏する。
- 歌詞を歌いながら演奏する。



(グループ活動時の配置例)



(全体練習時の配置図)

## ⑤ 全体練習と話し合い、そして仕上げ

- ・全体で輪になり、グループごとの発表をつながげながら演奏する。
- ・工夫した点をグループごとに発表。
- ・仲道氏が即興で伴奏をつけ、曲の雰囲気全員でつかむ。
- ・一通り演奏してみたところで、工夫できる場所は無いかな全員で考える。  
「最後の終わり方を、みんなでバーン！で揃えるといい。」  
「高さが違いすぎると歌いにくいから、変えるといいかも。」  
「最後の“しっかり生きる”のところで、皆で足踏みしながら鳴らす。」  
などの意見が出る。
- ・最後に気持ちを揃えて演奏し、仕上げる。



(全体演奏の様子)

- 詩の意味を考え、音に構造化していく活動を体験する。
- 曲の盛り上がる部分や終わり方に注目させて、工夫をするために意見を出し合う。
- タイミングを揃えるために、ボディパーカッションの経験を生かし、目や動作で合図する。
- メロディがわかるように、しっかり声を出す。
- 他のグループの作ったメロディやリズムを聴き、工夫を重ねる。
- ひとつのオリジナル作品として完成度を高めて、創作する喜びを味わう。

### 《まとめ》

今回で2回目となる七ヶ浜でのアウトリーチは、昨年引き続き鑑賞型アクティビティとワークショップを組み合わせた内容で、単なる鑑賞という受動的な活動にとどまらず、児童が主体となって創作活動を行うという能動的活動に結びつけている。昨年はまだ東日本大震災後の心の傷が癒えていない様子も感じられたが、今回はだいぶ回復している児童の様子が見られ、明るい元気な表情が印象的だった。

鑑賞型アクティビティでは、仲道氏は「見えない思い・言葉にならない思い」に気持ちを焦点化させることに力を注いだ。つまり「人とのコミュニケーションには言葉以外で感じ取るものがたくさんあること」、「感じようとすることは自分の気持ちに向かい合うこと」、「同じように音楽は心で感じ取るもの」「音楽には様々な感じ方や考え方があり、どれも正解であること」などである。

通常、音楽科の授業では、「音楽を特徴付けている要素」や「音楽の仕組み」などを中心に聴取することが多いので、音楽そのものの良さや美しさを味わおうとする力が不足する傾向にあると言える。そもそも日本の音楽科では年間授業時数が減少しており、歌唱・器楽・音楽作りの活動を進める中、じっくりと鑑賞能力を育むチャンスが少ないのが現状である。仲道氏は自らの語りと、魂のこもった演奏で子どもたちの感性を掘り起こし、高度な理解へと導いた。子どもたちは真剣な眼差しで演奏に集中し、それはまさに思考力や想像力をも高め、鑑賞能力を育む活動であったと評価できる。

また仲道氏は「黒鍵のエチュード（ショパン）」の演奏時に、子どもたちをピアノの周りに集めて演奏し、指の動きを実際に見せて、右手が黒鍵だけを弾くことを目で確認させた。そして黒鍵だけの音階でもメロディが出来ることを説明し、童謡「ぞうさん」を目の前で弾いて見せた。子どもたちは、「ぞうさん」のメロディが奏でられると、興味津津の表情を浮かべた。その後、「ぞうさん」を輪唱したり、フレーズを逆さまにして歌ってみたりしたのだが、それは次のワークショップの創作へのヒントだったのである。

また、マ・メール・ロアもバラード第2番・第3番も非常に芸術性の高い曲であるが、曲の特徴や背景、仲道氏の思いなどを聞いてから、演奏を聴取することは、イメージもつかみやすく、受け入れやすい。しかも非常に

インパクトが強く、その印象はいつまでも心に残る。これは生演奏の特徴だと言える。その体験を重ねることで、子どもたちは鑑賞能力を高めていくと考えられる。

さらにワークショップにおいては、ファシリテーターの役割を持った大人を活用し、限られた音楽の授業時間の中での創作・表現活動に取り組んだ。使用した詩は、岩手県釜石市立釜石小学校の校歌の一部で、その校歌は東日本大震災後に釜石小学校で避難生活を送った住民の心の支えとなっていたものである。この詩を、創作を通じて味わうことで、子どもたちの生きる意欲を育むこともねらいにあったと思われる。

創作過程は決して簡単ではなかったが、ファシリテーターが機能することで、短時間で形にすることが可能となった。しかし中にはどうしてもアイデアが出ないグループもあり、ファシリテーターが誘導せざるを得ない場合もあった。これはやはり、時間と経験を重ねる事が大事であるということを表しており、今後は学校との連携をうまく取ることで解決していくのではないかと考えられる。

今回の事業を振り返ると、次のように集約できる。つまり、鑑賞と創作の有機的な融合は、子どもたちが自分の中でそれらをリンクさせることができるようになることである。鑑賞で演奏の中にある思いを見つめた心の動きは、音楽を形作る要素に気づき、それを手がかりに理解しようと感性を働かせながら聴取能力を伸ばしていき、その能力は、創作においては、思いを反映したりメロディやリズムを操作したりする力となっていく事が期待できるのである。それは、単なる自由な創作ではなく、意思を持った楽しい創作になり得るのである。それが音楽を愛する心を培うのである。子どもたちにとっては、エネルギー溢れる演奏を目の前で聴きながら、演奏家の思いを聞いたことは、音楽教育にとどまらない教育的効果があったに違いない。今後の発展を期待したい。

(報告者／近畿大学豊岡短期大学 鈴木香代子)

#### 【助成対象経費報告】

一行：7名（仲道郁代他6名）

移動費（東京・多賀城）：

（東京・多賀城1名 14,080円、東京・仙台往復4名 85,240円、大宮・仙台往復1名 20,240円

宿泊（ホテルキャッスルプラザ多賀城）：125,600円（@7,300円×1名×3泊、@6,100円×5名×3泊、@6,100円×1名×2泊）

ピアノ調律経費：94,500円

合計額：339,660円